



北鎌倉台峯トラスト 北鎌倉の景観を後世に伝える基金

北鎌倉だより

会報

2013年10月 追悼特別号



春、老人の畑での事、夏鳥のヤブサメが囀っていた。ヤブサメの囀りは虫の音に似ているうえ高周波(約 9,000Hz)な為、加齢によりだんだん聞こえにくくなる。なだ先生は聞こえなかったらしい。次の歩く会の時、先生は子どもが喜びそうな集音器?を持って来た。「これ、アメ横で買って来たんだ、6千円だった!」私は大笑いしてしまった。

(写真・文:池 英夫 正会員)

なだ いなださん を偲んで

目次

■ はじめに	2	■ 寄せられた追悼文から	3
■ 理事長からの言葉	2	■ なだ いなださん と台峯の年譜	11
■ 「なださんを偲ぶ会」報告	3	■ 編集後記	12

はじめに

皆様すでにご存じのことと思いますが、創設以来当基金を率いてくださった、なだ いなださんが逝去されました。

当基金はその正式名称よりも、むしろ「なださんの会」と言った方が通りのいい程、なださんと繋がりの強かった会です。

追悼の言葉とともに、なださんが台峯保全に係るようになった経緯や活動中の思い出、また今後なださん無しで基金運営していく決意などを関係深い方々に語っていただきました。

なお、今秋 11 月予定の第 181 回「歩く会」を、なだ先生追悼の山歩きとして計画中です。詳しくは「編集後記」を参照ください。

.....

理事長からの言葉

.....

当基金の初代理事長 なだ いなだ先生が 6 月 6 日永眠されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

昨年 11 月の「会員の集い」では、先生は鎌倉の自然保全につき将来への懸念を表されました。また『常識(コモンセンス)』について、その語の由来や、医師として患者と向き合った経験から、其の時代により変化するものであるとのお話をいただいています。日常見過ごしてしまう様なテーマを深く掘り下げ解説して下さる毎年の講話も、この日が最後となってしまいました。



撮影・加藤拓氏

7 月 11 日は、暑い日でした。先生を偲ぶ会が、生前お気に入りだった目白の自由学園明日館(フランク・ロイド・ライト設計)にて各界の著名な諸氏も参列する中、しめやかに執り行われました。心のこもった数々の送辞、寄せられた弔電の紹介、また最後の講演(6 月 1 日日仏医学会にて)映像の映写などがあり、会場を先生との思い出をたどる静かな時が流れて行きました。

当基金の理事長として小生は、先生が「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」の初代理事長の立場で台峯保全のトラスト運動に尽力いただいた成果を会場の皆さんに説明・紹介し、進めてこられた活動の精神をこれからも引き継いで続けていくことを祭壇の先生に誓ったのです。

なだ先生――、

台峯は“大切な自然の宝物”として会員の皆様とともに今後も守ってまいります。これからも台峯の天上から見守ってください。そして、どうぞ安らかにおやすみください。

出口克浩

.....

「なだ いなださん を偲ぶ会」報告

.....



撮影・加藤拓氏

7月11日(木)13:30から東京目白の明日館にて「なだ いなださん を偲ぶ会」が開催され、なださんの娘さんの千夏さん、美樹さんをはじめとして、当基金の出口理事長、和泉理事など、計約200名の方々が参列いたしました。

この会の開催にあたっては、筑摩書房、婦人之友社、日仏医学会、老人党(加藤珠子さんのお世話になりました)などとともに関基金も共催者として名を連ねましたが、加えて日本テレビ、フレンズ オブ カマクラ 台峯、鎌倉・九条の会、岩波書店などからご協力を頂いた次第です。

弔辞は天野祐吉氏から始まり、何人かおいて当基金出口理事長、齋藤喜美子さん(故北杜夫人)、加賀乙彦氏と続きました。出口理事長の言葉は巻頭のとおりです。

参列された諸氏・諸団体の顔ぶれを見ても、なださんが権力に抗して、医学・文学・反戦護憲・市民運動そして自然保護にと幅広く活動されたことが改めて認識されます。

重要文化財指定の会場には柔和な笑顔の遺影がしつらえられ、ピアノ曲の流れる中を皆で献花してお別れを惜しみました。

.....

寄せられた追悼文から

.....



なださんの遺してくれたもの

1976年に台峯の開発が発表されてから、今年で37年に成ります。1998年、なださんは会の代表に就任する際に「私はゆっくりと根気良く、そして、しっかりとこの運動を続けて行く覚悟です。」と話しています。この言葉の意味は、大変重いものがあります。

他の住民運動、反対運動と同様に、当会も平坦な道を順調に歩んできた訳では有りません。目指す方向は一緒でも、さまざまな人が、自分は正しいとの確信のあまりの強さによって、他を否定したりします。そして分裂する場合も有ります。当会の理事会も毎回の様に、激しい議論の場と成ります。それでも当会は、不十分ながらしっかりと活動が続けています。

これは当初のなださんの「覚悟」をそれぞれが自分なりに理解していると言う事だと思います。これからも、賑わいや、便利さの追求よりも、台峯の生き物にとって優しい環境づくりを目指します。

望月晶夫(理事)

代表就任は鎌倉の緑地への恩返し

わたしは今から15年前の1998年に発足した台峯トラストには、創設準備会合の時から参加した。まったく面識はなかったが、北鎌倉・明月院近くにある、なださんのご自宅にお伺いし、「台峯緑地保全運動を成功させるために地元だけでなく、全国に広めたいと思っています。そのための“広告塔”になっていただければありがたいのですが」と、単刀直入に代表就任をお願いした。

「台峯緑地を保全するには、それぞれの立場で役割を提供すればいいと考えます。“広告塔”になれるかどうか分かりませんが、わたしはわたしなりの役割を提供します。これまで、長という名前の役職は引き受けたことはありませんでしたが、今回に限り引き受けます」。わたしの厚かましい要請に対し、なださんは笑みを浮かべながら快諾された。この瞬間、台峯緑地保全運動は、成功に向けて力強い第一歩を踏み出した。

なださんと鎌倉の関わりは古く、50年以上も前に遡る。国立療養所久里浜病院（横須賀市）で、アルコール依存症の患者の治療を始めたのがきっかけだ。「治療のため、患者に自発的にプランを立てさせ、ごく自然に三浦半島一帯を一緒に歩きました。鎌倉の緑地もよく歩いたものです」（なださん）。自然に親しむことのない生活を送っていた患者は、自然の素晴らしさに目を見張ったという。

なださんが台峯トラストの代表を引き受けた背景には、鎌倉の緑地への恩返しの意味があった。代表に就任したなださんは、台峯

トラストの企画第1弾「なだ いなだと北鎌倉周辺をあるく」を自ら提案し、毎月第3日曜日に市民と一緒に台峯を歩いた。この企画をスタートさせる前に「定例でやりますか。それとも不定期でやりますか」と、なださんにお尋ねした。なださんは即座「定例でお願いします」きっぱりと答えられた。毅然としたそのお姿が今も脳裏に強く焼き付いている。

（合掌）

野口 稔（前正会員）

なださんのこと

なださんは本当に権威とか権力とかいうものが好きではなかったのだと思う。

ご自分はお医者さんであったのに、『権威と権力』のなかで医者への権威などは必要ないということを述べている。この薬を飲みなさいとか糖尿病の人に砂糖などをたくさん摂ってはいけないとか権威的に言う必要はないので、患者にその病状をよく説明し、治るためにどのようなことをすればよいかということの説明してあげればそれでよいのではないかというのである。

基金を法人化するときに理事長になって貰えるかということが心配だった。しかしそれは杞憂だった。すでに基金の代表だったのだから NPO 法人の理事長になったからといって新たに権威が加わるとは考えられなかったのだと思う。

なださんが理事長のとき私は監事だったが、理事と監事の区別などあまりなくて、事務局の仕事をよく手伝った。或るとき基金が当時の石渡市長に何かの提言をしましようということになって、当時事務局長だった小林

京子さんに、理事長のなださんの名前で出すのですがたたき台の文章を書いてくれませんかと頼まれたことがある。

なださんは一人称で書くときは、「ぼくは、・・・」とか「ぼくたちは・・・」と書き出してやさしい言葉を使ってわかりやすい文章である。なんとかやってみますと引き受けて「私たちは、台峯の緑地を開発から守る運動をしている市民団体ですが、・・・」というように書き出したように覚えている。

理事会でその提言文を回覧したとき、市民団体ではなく NPO 法人だと書くべきだという意見が出た。基金の活動は市民運動だと理解していたのでこのような表現が適当だと思ったのだが、その時なださんが「NPO 法人だって市民団体なのだからいちいちそんなことを書くことない。ぼくが目を通したのだからこれでよい。」とかなりきびしい口調で発言され、そのたたき台の提言文はそのまま使った。私はそのとき先生に合格点をもらった生徒のような気がしたものである。

なださんは精神科医・作家という肩書きで紹介されているが、実際はリベラルで奥行きのある思想家だと私は思っていた。あるとき不躰に「先生は、ルソーを読まれたのですか？」と尋ねたことがある。そのときは「いやフランスの17世紀(だったと思う。)の本を沢山読んだ。」と怪訝そうに答えられた。そのときは不勉強で知らなかったのだが、後になださんが次のように書かれているのを見つけた。

「思想を述べた人の方に身を寄せて考える人は多い。だが、思想を受け取った人たちの方に身を寄せて考えるものは、意外と少ない。ぼくは自分が、その少ない人間の一人になれば幸いだと思っている」

私はこの数行の文章のなかに なださんの人となりが見えて表現されている と思った。自己の思想にたいする確固たる自信と普通の人たちに対するやさしい思いやりは、私が決して長くない期間ではあったが、なださんと接して感じたなださんの姿そのものである。

基金がなださんに負うところは多い。「なだ いなだと台峯を歩く」では台峯と基金に対する世間の関心を大いに高めたし、また台峯の取得資金として緑債を発案し行政に提言されたことは、基金の存在価値を行政に認識させるのに大いに役立った。緑債は台峯の取得には使われなかったが、広町の取得に際しては20億円の市債として実現したのである。

以前、私は基金が周囲の人から「なださんの会」と呼ばれており、そのことを誇りに思っていると会報に書いたことがある。今は外部の人間になってしまったが、基金がいつまでも「なださんの会」であって欲しいと願っている。

吉野 功(元理事長)

なださんとの距離が近くなった？

当基金の初代の代表としてなださんをお迎えしたのは1998年10月でした。

精神科医、作家、その後「鎌倉・九条の会」を鎌倉在住の井上ひさしさん、内橋克人さんと一緒に立ち上げた方です。北鎌倉にお住まいで山ノ内公会堂は近いとは言え、多忙な方で理事会も出席いただけないのではと思っておりました。

実際は、毎月開かれる理事会にほとんど出席していただけました。さらに「台峯は遠くから眺めるだけでなく歩くことで一木一草に愛情を持つようになる。この愛着こそが緑を守るという強い衝動を与えてくれる」とのお考えで月に一度ぐらい、みんなで台峯を歩くことを提案されました。11月23日に行われた第1回目の「歩く会」は150人もの市民の方が参加されました。

その後も時間が許す限り市民の方々と一緒に台峯を歩かれました。このような形で頻繁に接触する機会が増えても、直接お話しするときは意識してしまい、なんとなく距離をおいていました。

当基金は毎年一度、会員の方々との親交を深めるために「集い」なるものを開いています。「集い」の目玉は、なださんの「お話し」でした。昨年は11月23日北鎌倉の光照寺で行いました。少し足が弱くなったため、ドライバーとして自宅から会場まで迎えに行った車中での会話で「衆院選を目前にして日本の政局はどうなるのでしょうか？」と伺うと、「今後数年政党の離合集散が続き、期待は持てない」と断じておられました。同意見だったので強い味方を得た感じがしました。「集い」会場で、なださんの話が始まり、最近感銘を受け皆さんにも是非読んでほしい本として孫崎享著「戦後史の正体」(創元社)を紹介されました。実は私も1ヶ月ほど前に購入し、感銘を受けておりました。小さな個人的なことですが、その日は何となく同じ考えが確かめられ、なださんとの距離が近くなったと思っていた矢先での訃報、悔やまれてなりません。

望月眞樹(理事)



2004年11月第6回「集い」帰源院にて

監事として

なださんと初めてお会いしたのは私が35歳の時でした。それは、基金という性質上、公認会計士が決算にかかわった方が望ましいということで、NPO法人からお声掛けをいただき、監事に就任した時でした。その年は、私が地元藤沢で独立し事務所を構えて5年、複数の団体にかかわり始め、また、子供が生まれ、俄かに忙しくなった年でもありました。

そのため、理事会に出席し急いで帰るという状態であり、なださんとの関係は理事会などでお会いするなどに限られておりました。

しかし、なださんが台峯に対する実質的里山保全の強い意志をユーモアを交えながら、広く深い視点から語られる場面に居合わせることができ、日本のオピニオンリーダーの一人の話を間近で伺う機会を得たことは私の人生において大いなる収穫でありました。

これからも、なださんの意志を少しでも受け継いで、NPOにかかわっていければと思います。

林 雄一郎(監事)

なださんを仰ぎ見て

なださんは 私たちの会では決して激することなく いつも穏やかな、ふんわり包みこむリーダーでした。精神科医、作家、という肩書も、それが決して なださんの職業ではなく 在り方でした。緑地保全のリーダーを引き受けるにあたって「守ろうとしている緑地（台峯）を歩くこと」を条件とされ、その誠実な故に型にはまりきれない在り方を堅持されました。

私たちは、みな手弁当ではせ参じた、様々な経歴を持つ人たちの集まりです。なださんをリーダーに迎えたからには、先生のおっしゃる“常識”に基づき行動しなければと考えるてきました。（いつもそのように出来るわけではありませんでしたが…）

先生の雑誌のコラムには、ときどき楽しいエピソードとともに、この会のメンバーが登場しました。歩く会のガイド役の久保廣晃さん、カレンダーその他の写真の提供者池英夫さん、事務局として長年尽力された故小林京子さんなどです。

なださんは きっと大変な役を引き受けてしまったと 何度も思われたことでしょう。けれども 引越し好きな なださんが、思いのほか長く北鎌倉に暮らされたのは、案外“少し変わり者”の人たちとの出会いを楽しんでいたのではないかと勝手に考えています。

なだ先生、ありがとうございました。こちらにいらっしやらなくなっても、ずっと仰ぎ見て参ります。

市川節子(正会員)

飛び立つオニヤンマ

「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」の結成以来、その活動の核心であったのは一貫して台峯を歩くことにあったように思います。なださんが「まず歩きましょう。何度でも歩きましょう。」と繰り返し言われたことは、私たちみんなの心の合言葉になっています。十有余年の後半はお体の具合もあり参加されなくなりましたが、前半は毎月よく歩かれました。六月だったでしょうか、清水ヶ淵の中心に伸びた枯芦の上、オニヤンマの羽化に行き会ったことがありました。なださん始め数十人の大人が息を殺して三十分、トンボが濡れた羽を震わせながら飛び立つと、皆ホッと顔を見合わせたものでした。この光景は今も私の中に鮮やかな影像として刻まれています。なださんも幼ない日、多摩川の河原で見たことを思い出しておられたのかもしれない。この十月で百八十回、毎月の台峯歩きは自らを見つめ直す「行」、といっても苦行ではなくて楽しい行のようにも思われます。

東京で行なわれた「偲ぶ会」にも、かつてアルコール中毒の治療でお世話になったという元患者さんが何人も見えていたが、もしかするとなださんは患者だけではなく、周囲の人すべてにおだやかな治療の手を広げていらっしやったのかもしれない。

もう一度、台峯を歩いて頂きたかったと思います。

和泉あき(理事)

なださんに励まされて

私がなだいなださんに初めてお目にかかったのは17年前のこと、神奈川ネットワーク運動・鎌倉(以下、ネット)から市議選に出ることになり、なださんにご推薦をいただきにあがったときでした。学生の時に『権威と権力』(岩波新書)を読んで以来の自称なだいなだファンだった私は、「女性が議会に出ていくことが大事だよ。」と言ってくださったなださんにどんなに励まされたことでしょう。

当時の議会で最大の争点は、台峯と広町の保全でした。なださんをはじめとして緑地を守るために立ち上がったおひとりおひとりのお顔が浮かぶのですから、こちらも必死でした。緑条例の制定に始まり、広町の保全が決定するまでの8年間の議員生活は、私にとっても本当に貴重な体験となりました。

今、私は鎌倉の御成町でみどりショップの運営に携わっています。この店は、緑地保全のための資金を生み出すことを目的としてネットが14年前につくったリサイクルショップです。先の見えない市民事業に踏み出すことができたのも、そして14年間にわたって続けてこられたのもなださんが暖かく見守ってくださったおかげと感謝しています。なださんのエスプリに富んだお話を伺えば元気が出ましたし、なださんが優しい笑顔でうんうんと頷いてくださるだけで、私達の活動は間違っていないという自信を持つことができたからです。

それにしても、台峯が守られて本当に良かった。だって、台峯を歩けばいつでもなださんに出会うことができるのですから。

みどりショップの会代表 前田陽子(会員)

『権威と権力』を再読して思うこと

なださんのお書きになった今から40年程前の『権威と権力』(岩波新書)は今でも読み継がれているロングセラーですが、今回再読してその内容は全く古びることなく今日の日本人の置かれている状況を的確に描写、分析されており、同時に40年を経ても変わらぬ日本人の心象に驚かされます。

権威とはなにか。なださんは人を従わせ、委縮させるもの、また、権威を感じ、いうことをきく人間は依存者の心理を持ち、だれかに判断をゆだねる傾向があると書かれています。そのもたらす影響について、この社会を日常的に支配し、されている現状を幾つかの具体例で描写されています。親と子の関係、会社での命令系統、大学での教授と学生との関係、国家と人民との関連に至るまで眼に見えない支配力の源泉として位置づけられ、権威とは身分の格差を前提に成り立っていることが的確に描かれています。

昨今の富士山の世界遺産を巡る動向、東京スカイツリーをめぐる喧騒、そのどれもが権威づけられたものへの人々の従順ぶりを示すものではないでしょうか。

なぜ権威を警戒しなければならないかは、先の東日本大震災で最悪の結果をもたらした原子力発電を国は学者、マスコミを総動員して核の平和利用として喧伝してきた歴史があるからです。

なださんが昨年9月14日に神奈川新聞に「世界遺産より鎌倉のみどりを守ろう」と呼びかけられました。実際、当基金の初代理事長を担われ、台峯を毎月歩く会を組織され、ご自身も毎回参加されていました。また、

憲法9条を守る会の発起人の一人として講演活動にも加わりました。

権力とは権威を失った時、権力者が暴力で人々を従わせる時に発動される強制力でもあることを述べられています。毎日のように報道されているエジプト、シリアでの動乱、紛争をみるにつけ、権力の持つ怖さを身にしみて感じさせられます。そしてなださんは、なにがいちばん肝心なのかの問いに対し、「無知」からの脱却を訴えられています(同書163ページ)。

なださんから教えて頂いたことは、権威を疑うこと、権力の動向から眼を離さないことです。ここ鎌倉の地において、みどりを守る活動、「九条の会」への参加と、なださんの言説、行動はぶれることなく彼の人生を貫いていると思われました。

小田原茂夫(理事)



忘れ得ぬ言葉

私は台峯歩きのガイド役なので、直接、なだ先生とお話しさせていただく機会はありませんでしたが、忘れられない言葉があります。

『梅はいつでも見頃です』。「梅の見ごろはいつ頃ですか?」との問い合わせに、瑞泉寺の和尚さんが答えたそうです。愛着をもって梅を愛でるなら、いつでも梅は美しいということでしょうか? 15年前、私が台峯歩き

のガイド役を要請された折、季節の良い時だけでなく、一年を通して歩くならお引き受けします」とご返事しました。観光ではなく、台峯の保全をするからには、暑い日も寒い日も歩いてほしかったからです。その後、台峯に愛着を持ってくれる人が増え、現在の自発的な保全作業につながったと感じます。

『共に肩を並べ歩こう』。なだ先生が在仏されていた頃、坂道で汗だくになって自転車を押していると、少年が近づいてきて「手伝ってはやれないが、坂の上まで一緒に話しながら行こう、少しは楽になるよ」と。人生の苦労は自分で負うしかないが、支え合う仲間がいる、というお話です。毎月一回ですが、台峯歩きを接点に、温かな人の輪が生まれます。私は先頭でガイド役をしながらも、後方で常連の方と周りの人たちのおしゃべりを耳にして、何とも言えない安らぎにひたります。この温かな雰囲気があるからこそ、常連の方が核になり、友達まで連れて来るので、新人が絶えないのでしょう。

『美しいというより生きていく感じがする自然』。台峯歩きの際、オニヤンマの羽化(ヤゴからトンボになること)を見て、なだ先生が発したお言葉です。サクラとか紅葉とか、定型化した自然の美ではなく、名も知らぬ生物の営みが、思ってもみなかった新たな感動を呼び覚ます、という意味でしょうか。観光ではなく、くりかえし同じ自然を見つめ、自然と苦楽を共にする感性が育つことで、見えてくる世界があるのかもしれない。

梅はいつでも見頃であり、共に肩を並べて歩くことで、美しいというより生きていく自然に気づくことができると、なだ先生に教えていただきました。

久保廣晃(理事)

詩を通して

北杜夫の『どكتورマンボウ航海記』は小学5年夏に読んだが、発刊後僅か2年後とほぼ同時代であり、その後読み進めた文学作品も含め恐らく同世代では最も早い北氏の愛読者だったのでは、と思ったりする。高校時代にはご自宅を訪問したこともある。

この『～航海記』の冒頭で、船旅に出る北氏の前に「『なだ・いなだ』というふざけたペンネームを有するHが現われ」大波のおそろしさを説く。海を見て呟くブレイズ・サンドラスの詩も「なだ いなだ訳」である。また、パリの「プロフェッソール」を自称する床屋の解説をしてくれた「日本にいるパリ生まれのルネ・H夫人」とは奥様のことであろう。というわけで、恐らく筆者は同じ年頃で最初になださんの名を覚えた者ではあるまいか。

とはいえ、その作品はほとんど読まぬままだったが、後年大学で何か仏語の詩を暗誦するよう、という課題が与えられた際、ランボーか迷った挙句、『なだ いなだ詩集(スケルツォ)』中の日本語題で「夕の鐘 アンダンテ」という詩をふと思い出したのである。

une nuit s' est passée et deux
un jour s' est écoulé et deux
ne comptons plus les troisièmes

- à suivre

一夜が過ぎ / そして二つ
一日が流れ / そして二つ
だが もう三つ目の / 日を数えまい
(後略、作者による日本語の同じ詩より)

後に出版された『どكتورマンボウ医局記』に北杜夫がなださんと親しくなった経緯が載っている。医局の同僚だった或るとき、「妙に恥ずかしそうな顔をして、私に一冊の小さな手帳を手渡した。それを開くと彼が作った詩で、極めてセンスとエスプリに富んだものであった。」件(くだん)の詩も中に含まれていたのだろうと思うのだが。



暗誦した日から40年、当基金に加わって初めて筆者はご本人のお目に掛るようになった。そして、この思い出深い詩集に何か印を頂きたいと思いつつ、漸く昨年11月の「会員の集い」の場で意を決してサインをお願いしたところ、ゆっくりと心を込めるように字を置いてくださったのである。

今年2月、この「集い」での講話を会報に掲載する許可を求めてEメールしたところ、思いがけず深刻な内容の、しかし非常に明るい調子のご返事を頂いた。「今日は医者に膀胱がんでもう手遅れである、と告知されてきました。」「台峯のためにはなんでも役に立つものがあつたら、使ってください。」

最期まで台峯を気にかけて下さった、私の愛誦する詩人でもある、なださんのご冥福をお祈りする。

本田隆史(理事)

〈なだ いなださん と台峯の年譜〉

〈 年 月 〉 〈 事 項 〉

1990		この頃、なださんが山ノ内に転居。	2002	4	なだ理事長が石渡市長に緑債発行を提案。
1998	2	1日 ナショナル・トラスト設立に向け準備会が発足。	2004	2	なださんが『ちくま』に毎月1度鎌倉の緑地を歩いている旨を記す。
1998	10	15日 基金創設に向けて、会長に就任するなださんほか鎌倉メディアセンターで記者会見。	2004	9	26日 なださんが『朝日新聞』に台峯を「一緒に歩かないか」を寄稿。
		17日 基金設立総会開催。なだ会長ほか報道取材を受ける。	2004	12	鎌倉市が台峯保全を決定。
1998	11	23日(祭) 第1回「なだ いなだと台峯を歩く」開催。135名参加。	2005	1	なだ理事長ほか石渡市長を訪問、台峯保全決定につき謝辞。
1999	3	なだ会長が機関紙『北鎌倉の風』に「ゆっくりと根気よく」を寄稿。以後、ほぼ毎号に寄稿。 なださんが、『ちくま』に連載中の「人間、とりあえず主義」(以下『ちくま』と略す)に会長を引き受けた際の経緯などを記す。	2005	5	なださんが理事長辞任、顧問就任
			2005	11	なださんが、『婦人之友』に連載中の「つむじ先生の処方箋」に、当基金の仲間の死去と通夜への途上で転倒したことなどを記す。
1999	11	なだ会長が「北鎌倉・台峯トラスト1周年の集い」で講話。以後、ほぼ毎年「集い」で講話。	2009	5	基金が1,354万円を市緑地保全基金に寄付。
2000	2	なだ会長が代表就任。 なださんが『ちくま』に1年ほど前から台峯を守る運動を行っている旨を記す。	2009	8	なださんが『ちくま』に、死んだら灰を近くの山に撒いてもらいたいと記す。
2000	6	なだ代表が基金の「第1回講演&チャリティコンサート」で講演。以後、ほぼ毎回講演。	2009	9	なださんが「基金に寄付下さった皆様に」メッセージを発表。
2001	5	11日 当基金のNPO法人化認可、法人格取得。 第1回理事会開催。なだ代表が理事長に就任。	2009	11	鎌倉市市政施行70周年に市政功労者として当基金が表彰される。
2002	1	なだ理事長が石渡鎌倉市長(当時)に「赤道整備に関する要望	2012	9	14日 なださんが『神奈川新聞』に「私と鎌倉-市民が動かす保全-」を寄稿。
		書」、パリ市議からの陳情書、山田洋次氏からのメッセージを提出	2013	6	6日逝去。
			2013	7	11日 自由学園明日館にて、当基金が「なだ いなださんを偲ぶ会」を共催。出口理事長が弔辞。
			2013	11	17日 台峯にて第1回「なださんを偲ぶ山歩きの会」(仮称)予定。あと毎年の開催を準備中。



なださん、さようなら

＜編集後記＞

なださんは生前に、死んだら灰を近所の山の、アジサイか山つつじの根元あたりに撒いてもらいたい、と書かれています。(年譜参照)
実際のお墓はともかく、み霊は一体台峯のどこに眠られているのでしょうか。

そんな「なださんを偲んで歩く会」(仮称)の開催を予定しています。(11月17日(日)09:00 山ノ内公会堂集合) ご参加ください。

＜追悼特別号＞

発行日 2013年10月20日
発行者 NPO法人 北鎌倉の景観を後世に伝える基金
事務局 〒247-0062 鎌倉市山ノ内 704-9
(和泉方) Phone:0467-47-9892
HP www.kitakamakura-daimine-trust.org
写真 池英夫、市川節子、加藤拓、本田隆史